

第二二〇回 幻住庵俳句コンクール

審査結果 令和六年八月 幻住庵保勝会

選者 滋賀 恵美子

特選 秋惜しむ余生は俳を杖として

栗東市中沢二 萬城 巖

【評】秋惜しむ余生をどのように生きるかを、暗中模索しつつ長命を楽しみたいと願う時代のように思います。それに俳句を友とし、杖とされる作者の心意気に感動いたしました。

入選 観音の細きくびれに薄暑光

さいたま市浦和区 關口 邦子

入選 夏霞風抜けるほど密みがく

横浜市南区永田南 谷元 博樹

入選 腹に風些事ごたわらぬ鯉のぼり

大津市里六の二 宮崎 正子

佳作 敗戦忌帰還の父の肋骨

大津市石山寺三 小野 寛

佳作 夏山や岩影ひそと遭難碑

大津市里六 宮崎 正子

佳作 「ほうほう」と気脈の通ず鵜縄かな

草津市若草三 井上 次雄

佳作 ふたありはひとりになりし遠花火

京都市伏見区 本西 一代

佳作 揚花火琵琶湖の空を囃しけり

大津市柴町二 森本 和子

撰者 小林 紀夫(大津市俳句連盟)

特選 炭の位置ととのえてゐる土用丑

大津市柴町二 森本 和子

【評】売り切れると困ると思ひ早目に店に出かけると、まだ準備中で店の主は備長炭で火を起し焼台に炭を並べている。とこのえてゐるとどう中七の表現が素晴らしい、味じだわる老舗のうなぎ屋であることまで窺わせている。

入選 浴衣着て乙女に変わる教師かな

大津市柳川一 丸岡 正男

入選 顔中の口で育つや燕の子

大津市里六 宮崎 正子

入選 落蟬も胸に手を組み死にゆけり

草津市若草三 井上 次雄

佳作 少年のバケツを覗く西日かな

大津市松本二 松田 翔

佳作 緋牡丹のくずれし雨の重さかな

大津市里六 宮崎 正子

佳作 金魚槽囲む小さな膝小僧

草津市若草三 井上 次雄

佳作 手のひらにキラメル分けし聖五月

京都市伏見区 本西 一代

佳作 おたまじゃくしフラダンスして生まれおり

大津市大萱二 松田 和子

選者 山田 鳴子(日本伝統俳句協会)

特選 ともかくも三票入り冷素麺

京都市伏見区竹田 本西 一代

【評】お昼何にしましょうかと聞いて、素麺で良いよなんて言われたら、主婦はムカツとします。作る過程がとても暑いからです。」ともかくも「は主婦はあきらめの言葉ですね。多数決で決まれば仕方ありません。」

入選 水泳と言ふ程でなし海育ち

大津市光が丘町一 大槻 幸恵

入選 幻住庵先客のあり昼寝中

柏原市法善寺4 藤本 公子

入選 炭の位置ととのえてゐる土用丑

大津市柴町二 森本 和子

佳作 豪農の白き土塀や蔦茂る

大津市田辺町 山田 流水

佳作 青青と鵜殿の葦の大茅の輪

高槻市高垣町 四方 よね子

佳作 ことのほか十葉白き雨の庭

大津市柳川一 圓井 公子

佳作 金魚槽囲む小さな膝小僧

草津市若草三 井上 次雄

佳作 木洩れ日も通さぬ山寺の茂り

八尾市高安町北 加藤 ちえ

撰者 志村 宣子(現代俳句協会)

特選 訪ねきて翁の化身か夏の蝶

八尾市開曙川東 米澤 悦子

【評】幻住庵の入口、蝶がひらりと出迎えてくれた。芭蕉は奥野細道を二千四百キロの旅をアサギマダラは西南諸島から二千キロの旅をして本土に。作者も庵を訪れた俳人。旅人同士の出会いに蝶を芭蕉の化身かと感じられた。

入選 脱げ殻は仏の顔や鬼やんま

大津市松本二 松田 翔

入選 落蟬も胸に手を組み死にゆけり

草津市若草三 井上 次雄

入選 晩年も湖をはなれず草を引く

大津市柴町二 森本 和子

佳作 梅雨湿り式部思案の間の畳

城陽市今堀 林 力朗

佳作 五月闇裏み隠せし幻住庵

宮崎県児湯郡新富町 高木 智念

佳作 雲の峰存分という高さかな

大津市柳川一 丸岡 正男

佳作 蝸牛雨の明るき幻住庵

大津市柳川一 丸岡 正男

佳作 尺蠖の泣けるが如く立ちあがり

草津市若草三 井上 次雄

撰者 馬場民代(幻住庵保勝会)

特撰 空似とは淋しき増して帰り来し

大津市柴町二 森本 和子

【評】季語のないことに少し躊躇したもの、自分の記憶の中に在った人とそっくりな人に出会った高揚感、そして空似だった虚しさ、人生でそう多くない経験が無季語ゆえに一入の淋しさを表しているように感じた。

入選 頼まれし椎の木は老ゆ夏木立

大津市仰木の里二 久保田 耕平

入選 一本杉命の太さ見た真夏

横浜市南区永田南 谷元 博樹

入選 晩年も湖をはなれず草を引く
大津市栄町二 森本 和子
佳作 泰然として炎中の硃灰石
城陽市寺田今堀 林 力朗
佳作 宇治橋も暮れて鵜匠を待つばかり
宇治市小倉町西山 伊豆 益一
佳作 シヤガールのれもん色の空夏燕
大津市柳川一 丸岡 正男
佳作 腹に風些事こたわらぬ鯉のぼり
大津市里六 宮崎 正子
佳作 ふたあたりはひとりになりし遠花火
京都市伏見区 本西 一代

【今回投句数二八六句】

【選外佳作】

撰者 滋賀 恵美子
とくとくの清水影濃し水馬
伊勢市浦口四 坂本 剛子
合掌の袖に香るる金木犀
四日市市富田 川上 菜摘
入道雲彼方に父の征きし島
大津市里六 宮崎 正子

撰者 小林 紀夫(大津市俳句連盟)

夏風を切つて自転車若き僧
横浜市南区永田南 谷元 博樹
ふるさとほ孫の代なり鯉のぼり
大津市里六 宮崎 正子
晩年も湖をはなれず草を引く
大津市栄町二 森本 和子

撰者

山田 鳴子(日本伝統俳句連盟)
水の音緑の匂い石山寺
大津市大平二 中川 菜々美
宇治橋も暮れて鵜匠を待つばかり
宇治市小倉町 伊豆 益一
石山の木陰に涼む川の音
豊田市日南町三 岩瀬 大起

撰者

志村 宣子(現代俳句協会)
夏痩せも知らぬ人生米寿なり
大津市光が丘町一 大槻 幸恵
腹に風些事こたわらぬ鯉のぼり
大津市里六 宮崎 正子
馬場 民代(幻住庵保勝会)
夏風を切つて自転車若き僧
↓夏風を切る自転車の若き僧
横浜市南区永田南 谷元 博樹

撰者

【選外佳作数 一二句】
【今回投句数 二八六句】